



芝罘村句集前編



目 14  
文和857  
號 1

夜半のうらやま村老人  
のうらやまのうらやま  
のうらやまのうらやま  
のうらやまのうらやま  
のうらやまのうらやま  
のうらやまのうらやま  
のうらやまのうらやま  
のうらやまのうらやま



こころをいかに説き及ぶか  
惜むるをいかに説き及ぶか  
喜ぶをいかに説き及ぶか  
枕をいかに説き及ぶか  
此をいかに説き及ぶか  
此をいかに説き及ぶか

一集越撰書肆佳業あり  
ちをいかに説き及ぶか  
小祥忌辰の事も説き及ぶか  
此をいかに説き及ぶか  
此をいかに説き及ぶか  
此をいかに説き及ぶか

三  
り終りの序を要するに  
わきまを免れ也旧撰五十餘年

おろ中巻

三  
三

藍公羽白集卷之上

几董著

春之部

やうらうらうはたのちむ光の妻  
日の光とるれも籠るのうらや祭  
之腕の雑煮あるも長者あり

離花

くさしのあちちとよるやふ流り  
習る声きき日と暮らうら  
うさむとの産おれは初音あり

夢を催ふとえーろれも書

馬賢

くさくさや清きるる夜斬る梅  
雪の目眩をすしうにき音ひ  
くさくさや家内梅を飯時か  
雪や淡くあまて高き石ひよ  
くさくさ入啼やちいさき口ひて

禁城春色暖蒼々

青柳やふ大君乃柳うまう

若き子こ想をさすれらる柳をか  
梅あつてさくさく梅ーやまひ  
梅やこそ柳かきるる雨のふは  
る柳や芥生の里のせうの中  
出る花をさくさくさくさく柳をか

草庵

こもれ梅こもれ梅をさすか  
くさくさくさくさくさくさくさ  
白梅の墨書かよ 鳴鶴の鼓

志ら梅や道にさよふ京垣より外  
舞の場もあはさう梅もも  
心後とてとまぢあめりめは箱  
宿の梅おねをんちあうこり京  
摺子本て重宝をばさう  
こころをよむ政の嚴判を。  
をいさしめあふ御書を代  
るまうあわし

隈くらぬささたれくをれを

しら梅や山せ茶屋にさすらぬ  
らふみや螺鈿の舟を卓の上  
梅のて帯穿つよ家のたかろを  
原儿をうらうて梅のあらし  
地をさして人あそむや梅う扁  
あしあし一の伝名をらやが  
字儀の書あそむんハサ  
梅のぬれうむぢやうらうめ  
あらし梅の梅あそむるなあ

小室の賣小菖の梅の花をみくら  
梅を色 南の空くふす色く

早春

ふに女や京をさるる世を信  
思志の燈印くや谷の氷まを  
よふ入の雪やふきの香るうち  
春のやとふ目さうのきを信の  
やぬらや守袋をりされ草  
短ふ入や弦染のいある春のふ

てぬ力を中山寺乃男こふ

人日

七のや袴のぬり片むす  
あれさうく徑をさう芥の中  
さるやあさうく梅をさる中  
九菫とりされをさる

あさうく

節まさうくおさうの春  
肘白を僧乃さうおや雪のさ

春のあつこきを思ふをちかむる  
春月や宇金堂の木阿の葉

春夜聞琴

蒲団の厚のなもこやおあけ  
お訂く馬帽子けりあきの袖  
公達く折化くうり方の子  
そらそらの待客ハ千金の  
音をとりお我家の音に  
むらぶきの曙を賞す

春のあやもりのあけの具中  
女俱して内裏あすんあけり月  
葉はむむ女やハをたかろり  
うけしんを宿よて少家や籠月  
さしきを笑てあけおや朧月

野を

草を履け水も声あき日なれ  
指南車を胡地より去る霞  
さき舟よりさきさきくさるる



橋ふして日暮んとする春乃水  
 春乃水背戸々田仍んともたふ  
 其のゆくたく移輝の移るを  
 西の京もたげの拙て  
 久くあれ果る家  
 五ノククハハハハハハハハハ

春雨やもはる路中若るりりり  
 春乃水背戸々田仍んともたふ  
 其のゆくたく移輝の移るを  
 西の京もたげの拙て  
 久くあれ果る家  
 五ノククハハハハハハハハハ

春乃水

春乃水の書もたれありれある  
 て成さぬや暮あんとてらもあ

春雨やあつちやく兼と傘  
朱漆の籠もやらそ春の雨  
春雨やさきづふ月のあま  
まのこや潮の流る小つとく  
ある陽生るまき

古庵う茶釜花さく椿の  
あぢきや椿庵らむにほさみ  
玉人<sup>タミスリ</sup>此は春う望らくはるま

細中やそのましくろ袖たみ  
たはむらや春雨四塚の影の  
初まやあけつりう日のある  
春らあしも志らまよ落のま  
ある人れもまき

命婦のあつ餅たきよはるま  
うまくに京あまろくめ田にま  
ふたうま津まは里や田標あ  
静らう塔でぬ虎たよりうま

乃て警破田に一のたを同  
丁行て門田もなぐおもひ  
返るる田よの月る日やの  
せれあまこまいた原のま

郊外

物たや名に〜あまの白き  
うけりあも實く土をま

芭蕉庵會

畑はたや〜あまの

まをわとあまの在所の種  
細おやあるれされ後

ふあ〜

去あろ甲〜あまの  
目〜あまの種子〜あまの  
柴刈〜あまの種のお  
亀山〜あまの大工  
瓦山〜あまの  
む〜あまの種

本丸の隈々自類に住きく似せ

其心拙美人

妹々垣根さき草乃乃花咲め  
お梅や比丘よりある比丘尼寺  
紅梅の薔花綻らむ馬の糞  
垣根くものさくらる接木外  
裏門より古に逢着有とあるを  
畑もちや法三章スられのもと  
さし傍や草の身おろし八平氏

さし傍や草の身おろし八平氏

西山定日

ひる乃乃尾をぬむ春の入日哉  
ま<sup>キ</sup>日や雛子のりなる栲の上

懐旧

庭さ白の法りて老をびりか  
春の所秋日のさしくは  
島らつや老を人啼めひりけ  
耕や五石乃粟のあまら良

ふらふらやどけらるや我産  
大は病つゝ糞をりや〜 蕪り  
大和後の宮もつゝをもしはをり  
はをりや水田の風〜 吹れ息  
蕪り〜 吹れをりつゝの家

無為の詠會

曙の吐ききき〜 乃幕や表の風  
みそまのはゆ〜 蕪りや表のり  
片所〜 さらば際るや春乃風

の〜 吐ききき〜 乃幕や表の風  
みそまのはゆ〜 蕪りや表のり  
片所〜 さらば際るや春乃風

几藪の蛙合催〜

月〜 吐ききき〜 乃幕や表の風  
みそまのはゆ〜 蕪りや表のり  
片所〜 さらば際るや春乃風

くはるまきつあしあらん此胡蝶  
 賤の雨やまくるる乃存りら  
 よもやうら青方なきあや種後  
 古は此流をり此種なり  
 志のうらま雨降のや焼ゆ  
 か人扱長帯力いさよぶあま  
 も乃こも東左曾給の入りて  
 乃んらんこいおあす  
 錦の小袋をさうきとらう

物流たるとおもひ可はす  
 春色うたふ結れ  
 山吹や井を流るゝ艶屑  
 唐たる舟をよれハそみれ  
 骨松よ人こ志さす  
 けいあやうさお舞ん枯  
 野ともた焼る地なれ志  
 流しあやあそ所く  
 流しあやあそ所く

近頃の心ごとくは、御濁を  
片し、嗟て片山里乃、飯白し  
岩の腰、我れをえり、片し、身

上己

古雛や、ひりひりの人、袖ル、性  
か、花を、むる、良、は、それ、や、雛、こ、對  
た、し、ち、の、片、も、よ、と、あ、や、雛、の、鼻  
心、代、や、長、さ、さ、か、く、と、た、首、を  
雛、見、世、乃、釘、を、引、こ、う、や、長、の、面

雛を、る、都、を、つ、れ、や、桃、乃、月  
嗔、や、痛、く、牛、つ、な、ら、た、や、桃、を  
南、人、を、呪、る、衣、あ、り、も、は、花  
さ、ら、ら、と、桑、桃、つ、ま、さ、し、せ、小、家、は  
家、中、に、あ、り、さ、び、り、り、振、り、や、は、看  
几、中、の、あ、の、の、そ、の、あ、り、と、こ、ら  
や、ぬ、り、の、あ、ら、い、て、さ、あ、ん、中、の、糸  
風、入、馬、蹄、輕  
木、の、下、り、蹄、乃、を、や、散、さ、さ、る

まのくらの夢はくちしの梅  
剛力の徒く見さぬ山さぬ

曉臺の伏水に流るる水は  
お花林を流るる水は

暮れとて春をくちしの山さ  
銭幣して今もやうに山はさ

糸梅賛

雪く暮れて雨もさるる山さ  
奇眉のたうぬれて山はさ

あつてもおりのもあぬ山梅  
咲ぬいと日周院探るる山  
みよりおちるる山梅  
旅人の鼻おちるる山梅  
あつてもおりのもあぬ山梅

吉世

花くをく梅く池が川  
おちるる水は流るる水は  
おちるる水は流るる水は



花の風絶えてあをほくはる人  
あはる春のさくさくはるる花

高野をたのむ日

うれ住て花く真田う諷うか  
正川くさくせく花や流れ去  
たうら乃や當坂をけろ花一本

日暮るさくさくはるる

岨我へ海の人からこの花は暮  
花の香や道草のとも火は清時

雨日花のさくさく

花士の簪やありの花衣  
花散ら後のせしめてをえさ  
むし舞でひさみどり白拍子  
花くまて花くいぬあるいよる

たのむさく人のあやめ

やまのめをたのむ

花を縮く草履もたておあ  
居るさくさくはるる花のさくさく

雪ふるたましく帰や花のひ  
物かたらの春はゆたふる花よりと

一片花を減却春

さぬ指義人入る後や減却を  
花の舞舞を飛く女あ葉

やふと飛やけけこのさうおう

はせあひてう後うのさう

よまのひんさうあや

小冠者やて花はるくを外はるう

あちしあるなもあまき春の春  
誰よのひんさう花をたはれられ  
閑帳乃歸たきさう長の夕  
くくあひのさあれを春の目くれたう  
春のうたはあひさる香をたけく  
橋ちやてあつらう寺とあやう  
苗作や歌るの橋ちううら葉  
甲かまうねくやあさうれ梨うも  
梨のち月書よまむ 女あま

くあて日あゝ培よ片柳の香  
山もとん米踏音や春のちぬ  
ふたむらに春もあけて春は花

春景

春の元や月もあゝ日ハ其  
たのそぬや筆かゝるや春はあ  
菜のそや鯨もよら日海春め

春次商會

行壺て南阮の風もあゝ入る日

梅もあゝ床ハ維方々春音

暮春

ゆも春や遠巡とてふあゝ  
ゆ春や播者をくらむ春も主  
流足の鹽も海もてゆく春や  
そあのもろ春をあるはは舞多

台波のふ業うおいて

ゆ春や白下花も中垣入り  
春もあゝむ座主の驟もあゝ花は紫

行きたるはなはたの春の  
まはるる日と春の影うら  
や春の掃くもの神  
あはれくさるるを

あはれくさるるを  
春情む宿やあはれなる

夏之部

須衣のあはれ中ゆき夏衣  
はあはれをい人のまはころもえ  
大兵のたすあまのやあはれ  
ころもえのあはれあはれ二人

あはれ

夏衣のあはれのあはれに白  
たのしみあはれのあはれのあはれ  
瘦腰の色にあはれあはれあはれ

あはれのあはれあはれを夏衣

あはれのあはれのあはれの

あはれのあはれのあはれの

あはれのあはれのあはれの

あはれのあはれのあはれの

あはれのあはれのあはれの

あはれのあはれのあはれの

あはれのあはれのあはれの

あはれのあはれのあはれの

あきそてふつしめを中在能  
かきよ侍中都のそらたのめ

大徳よこて

町を獲るを中東四帝以能  
岩倉乃御女志せこ子親  
稻妻も乃出能よおや町を

あおねらよ能目

みやこのなまかき

りするふとあらいや能かよ

あきそてふつしめを中在能  
草の雨空の車よてのめ  
おめあておきまめ三二片

波翻言本吐能連

間王乃口や牡丹を吐んとを  
寢よて客の控るれりそん  
地車乃とろとく牡丹を  
ちうそなあしめくちん  
牡丹切て氣のおしらぬ夕五

山蟻のあらしきるこ 自牡丹  
 廣庭のつとみや天乃一方  
 集落乃主人在新布穀の  
 二果をむしてはれ一穀  
 発るをよとあしきれて井を  
 王侯の交らむかの鶉衣被裝  
 りて山ゆき名刺をいと  
 お店主の首かけは鞆鞆なる  
 閑居なるるや 孝母なるや

みんかんこうんせうの鳥たのり  
 食次の底たたく音やうんこ  
 足跡を字もよみし閑居  
 とんめくき置のきやんこ  
 かくしき鳩の礼義やうんこ  
 閑居なるさうの標も踏て居る  
 うんここのもたう不可もふか  
 揮乳每盛  
 名の北くぬ志のうろち

をくつてくつてとるのたれて  
音くのおく音たの杜より  
や裡序く柳まゝ別る

みーる夜や六軍の松くまたら  
能くしてあつてまひあ年の門  
みーる夜やまのりの上くあのを  
夜あや同ん流るりも水  
とーる夜や花くちを浪序  
夜夜や芦間流る蟹の泡

みーる夜や二んあゆくち井川

揮歌老犬

みーる夜を解らてあるわ公あ  
夜あや浪らち序乃捨篇  
みーる夜やとあある白拍子  
みーる夜や小る世あある所て  
東都の心を津の揮くある

夜あや一つああるて志賀の松  
みーる夜や伏見の音くそ淀の意



卯のまの天のくもを落の廣をよけ  
まきてこれをも乃様実とあめめ  
急位上人のちれもよひせ  
たるかのいとぬしきとほこ

実さくや死のころたる菴のま  
志のくややえくあくく夢の雨  
砂川や或ハ夢を流れ北極  
夢のまをけ君とちを雀 船  
三井さや日ハ午みせまるの若柳

あらたうく産をトたるに

初まのく情まきらめ住居をさ  
ゆををきて奈良とまきゆふれさ  
窓の燈の相くくのあるる若葉外  
不二とつうとみせつとまらふ  
龍頂の城たのしむとまらふ  
み葉として水白くあま黄こり  
山々ほきてふ舟漕やくもたふ  
船を載てり家お路のあまらふ

おぼの肉くろるおめでん  
尾寺の能々懺たるも音月  
あら深し 袿吹おぼも根子  
物心をもて肉く居れ力のぬめ

もよこら三平樹の

水穂あゝ真し

ゆやまをくおをくらてやま  
百井戸やおく長物魚の音信  
ふん用くおの居水ゆくおあ

おやりしとまつす僧の坐を

おぼあま

三朝家入お人乃くやの  
おの音もおの花の散らひ  
諸子比校の傍るく念を  
いとたよのよめは行われ  
おぼはらて翠微はるま家の内  
若竹や櫛女の抱女あつた  
笋の義の葉肉やを

若竹や夕日のおとこやあつらひ  
笥や 瑠璃のはやうな寺とらん  
うそをいふおとこもあつらひ  
垣根と墓のむすんでやうな

若竹の根をいふ

うらみと昔あつらひをいふ  
もつたやあつらひ乃あつらひ  
病人のおもひとあつらひ乃あつらひ  
藤屋の根をいふとあつらひ

若竹の根をいふ

目おのり

あつらひはあつらひをいふ

狐やうらみとあつらひ

大魯几董あつらひ

あつらひ

若竹やあつらひ乃あつらひ

丹波のあつらひ

あつらひ

あはききと能をあるのまじり  
能梅をよれつと樹下く床に  
能くせし能待ともしあやふ  
能すしやえ振つ輝くやうな

免足と月の正當は女月仲の冒

たふるを卯月のそなたをわて

區管とふこはたやちを

麦刈ぬゆくたすやをほの程  
かうそめたる百合生けの谷の房

かの康阜つこのふれを

花いせらぬの路よ 此の家は  
路たして香ふせまの候いたらうか  
愁ひは思つこのふれを 花いせら

浴康本草蕉菴成日

耳目肺腸の玉をたをちん泡  
まを梅の眉あはれぬ美人共  
青くやをよてはうあるを舞来る  
うちりやむらぬの女身あちをさる

夕陽や水青鷺の脛をうた  
たちをふるらる水時や右殿  
良花のこをきくつれて

粽解て芦の音の音ゆり  
友山や海にふれたるあはれ人

逐懷

推の元くもまをさあくまをさ  
水保く利謙竹らまをさあはれ  
志のまやあはれの道にの味も

採草を初ふ音根の儂ま  
葉のまやけをれら此月も  
路のまの刈る葉元さくまの  
出のまに害りれ花の枝の花  
浪華る舊心あやうて  
法心れ俳士を集めて  
あはれまを道しるま  
うまをさあつるまや花あり  
さみまのまを柱やまをう

湖へ富士をまよふやうに  
 きておれや大河を前う流二新  
 きたれや佛の光を捨てる  
 小田来て合羽着るの白傘月雨  
 さまおれ乃大井強たるり  
 さらば雨甲毎乃周とあり  
 青飯は仰にんがて  
 旧識の只とくこの合  
 水桶くくあつさあや此

流さよの碓くらさむなる  
 周十秋ゆりもてりやな  
 たりし玉なつ地ナハルなつ  
 行くとおれ行しおれ  
 みるのくれ五言な草麻  
 たくれ  
 葉うらぬの花さうせと  
 離るれたる力を踏めて  
 能はるめる田松乃男

持衣の袖のくら 這ふかゝるは  
一書生共用窓の中を

学問ハ尻ううぬけるかゝるは  
了しやう共用字乃に一と虫  
抱生の佳きと宿やうと目  
おひやう屋をぬるうやう  
雪信う輝うちおふ 現の車

愚談

おと葉多くお此うと女うと

関の戸に水雛のくら青たうの葉  
暖乃軒も合歡の葉  
輝いとふ力をたうとるおの車

春は春を春の山に  
誰住て橋屋を新川  
おのうわ物をのうたる  
老あし新のこしハス  
居る乃名を白なる新川  
新舟漕く水霧を照り

な百日佳もやあはくうふ  
日を以てあふる華の夏あは  
あま子病存不二の事

尺八成りやあは

降入て日校を北十乃化務うそ

る南判髪三を掛きて

眼ある梢もあし乃小あは  
石上の鑿吹——たるは水うそ  
落合を音ふくあれるは水うそ

丸山より水うそいさせあを写す

たるは髪をうそをみあはを  
仕友縣令下の比く棠判を  
もとあはうの志あし屋を

派中く由くうあ

鏡魚の青磯もあは山屋水  
之へてあはを濁るはあは  
我宿ういさあ川屋あし——あは  
草いさ九人死屋を九の立



唐の唐乃三十里  
少くかや黄く笑ふ原をみたり  
夕白の花嘴は猫や竹ふさく

律院を歌す

石もこの四ツをさしけり  
蓮の香や水をとあるや  
若くは  
白蓮を切らんとおほく  
河骨の二もさくや

花のみのみとれあそぶ  
やをらたら入るる  
つたうとて

羅く 遊る蓮乃くをい哉

夜日三句

雨乞く是る園目乃く  
負殿の守敏も陪守早  
大粒な雨ハ祈乃く  
お水もる里人のあやな月

堂ちのろ中草ふくた友の月  
めけけろは能くも何事れ  
何童の思さる宿やなろ月  
所小家ろ月あやおんそ陽君子  
雷く小家ハ嬉れて所の心  
あさ花ハ雨くうれて此をけ  
あさうううて

弓れの帯の袖さきたあろ  
細腰く夕風さるる 簞

若根うて

あま所の比拵もちり 若根山  
師佛く登海へかりいとあ所  
五病之智のあま所送る松園

篤居

半日乃閑を構やせみ此夢  
大佛のあまそ宮様をみろ色  
物作の行者ろる午の刻  
野の帝や傍正城のゆあも時

うけ香の何とあるせみ夜  
かけ香や唾の始るいさな  
け香やうせれある袖たみ  
雁宿くくおとたれきあれた  
よとたてふの裏障おかつる  
とくしてまうたのはるふ  
狩園のそれとほ中席にお夏な  
きすよの周画んあけ  
後一等草乃あそころふ

七日

後を今やま首あるの  
きとて今や傍の傍なる  
かたる西岸く揃を  
大の口うさたりの  
細おのたすあつり  
そとさや都をほま  
首圃く視を  
河原や蓮うまう傍も

川床の物まは御のま居るを  
涼すや寝ををたのむる夢

鴨向うあそぶ

川船や樓上の人をたのむる  
あそぶ月誰やあそぶの寝白さ  
月を對を君の座網乃水纏  
川船や海を乗るとおぼすをこ

雙林寺指籠千句

ゆわらちや華もふらとて一千言

白布の門脇のく人たより  
夕くらちや草葉をほむむむ雀

施米水粉

暇あそび傷ふけり施米は  
れろ粉のまのうらや草の庵  
ふの粉やあそぶとほふか君

旅意

北日路ろ宵中くろやを將  
揚州の博もろくそくやれ者

角とぬきおはしとをせらるる  
そのとお四澤の取乃洞てより  
飛撥とふや富生れ産せふおあり  
日海しの瓦山産るあはしと  
居るる舟と産るる暑るる

揮毫宗廟本者

墨守日の刀とゆるるるを  
宗産るる者お産るる大に  
者をとて居るる者おとみ

超居して妻子を避るる者

花乃山の會し揮毫

塵居生いらくおとせぬ人  
出たれついの傍りよ東大寺  
ととらん逆一るる銀河三千人

言智

甚るるやとるるをたつて  
裡力くおとせのやせ友邦  
比もたつ補宜ておとせ

負北天の宵申屋をやなをらん  
出火のかきやう柳並し夏後  
鴨河乃不よのたの  
田中とのるほまて  
ゆあふらうとれ風とよくおを川

蕪村白集上巻終

目 14  
和 857  
1